

## 批評と紹介

ラグ・ヴィーラ教授・ローケ  
ーシュ・チャンドラ博士共編  
『完本ジャイミニヤー・ブラ  
ーフマナ』

辻 直四郎

Jaiminiya-Brahmana of the Samaveda. Complete text critically edited for the first time by Prof. Dr. Raghu Vira and Dr. Lokesh Chandra. Sarasvati-Vihara Series vol. 34. Nagpur (International Academy of Indian Culture), 1954. III, 513 pp.

ジャイミニヤー・ブラーフマナ (JB) の存在が、バーネル (Arthur C. Burnell) により始めて學界に報告されてから (Academy, London, Sept. 29th, 1877, Feb. 8th, 1879) 約四分の三世紀を経て、ついに完本が出版された。發見者みず

から、ヴァルナの子ブリグが死界に降つて善惡の果報を目撃する話 (JB I. 41-43-42-44 ed. nova, cf. SB XI. 6. 1) の原文に英譯を添えて出版し (A Legend from the Talavakara or Jaiminiya Brahmana of the Samaveda. [Privately printed] Mangalore 1878, cf. IV. OC [Firenze] Atti II, 1881, p. 98 sqq.) かつブラーフマナの重要性を指摘した後、W. D. Whitney はバーネルの轉寫にもとづいて複本をつくり、Hans Oertel が一八九三年以來逐次發表した重要な研究の素地を築いた。次いで W. Caland の内容豊富な論文 (Over en uit het JB. Amstardam 1914) ならびに抜粹 (Das JB in Auswah. ibid. 1919) により JB の内容の梗概と多數の挿話を知り得たが、サーマ・ヴェーダに屬するこのブラーフマナ本來の使命たる祭式規定を明かにするためには、完本の出版を待たねばならなかつた。資料とすべき寫本の不足に妨げられ、Caland すら敢えてしなかつたこの難事業も、Raghu Vira 教授が第一卷を完全に出版するに及んで (JB of the Samaveda Book I. Lahore 1937) その實現の可能性に多大の希望を生じ、その令嗣 Lokesh Chandra 博士により、第二卷の一部が續刊されし (The JB of the SV II. 1-80 (Gavāmāyana) critically edited for the first time, Nagpur 1950) その完成に更に一步を進め、今兩者の名をこめて

舉に全篇が公刊されるにいたり、學界多年の待望が満たされたことは、ヴェーダ研究史上の一偉業として記念すべきである。Raghu Vira 教授の主筆する *Sarasvati Vihara Series* は、ヴェーダ研究に直接関係のあるもののみを舉げて、

*Atharvaveda of the Paippalādas*, 3 parts (1936-1941),  
*Sāmaveda of the Jainīyās* (1938), *Sāṅkhāyana Śrautasūtra* transl. into English by W. Caland and ed. by Lokesh Chandra (本誌三七・一・一一一—二二頁参照)

を收め、ヴェーダ學に寄與するところ頗る多いが、今また本書を加えて光彩を添えたことは同慶に堪えない。これによつて挿話の寶庫が開かれ、マントラに關する知識は著しく増大し (cf. Lok. Chandra: JB. II. 1-80, p. II-VII) フラーフマナ散文の語法及び語彙に重要な資料が提供された (cf. op. cit. p. XVIII-XXIV)。

JB は三卷からなり、シヤタパタに次ぐ大ブラーフマナで、今次の出版に従えば、第一卷は三六四章に、第二卷は四四二章に、第三卷は三八六章に分れている。新版は従來の研究を全て參考し、新たな寫本を利用して批判的檢討を加えた結果であるから、さらに優れた古寫本の現れない限り、JB の研究は今後長くこれを出發點とするに相違ない。しかしその完全な理解には、複雑なヴェーダ祭式殊に歌詠に關する技術的

知識を必要とし、特にパンチャヴィンシャ・ブラーフマナとの比較が肝要である。幸に後者は Caland によつて英譯され、豊富な注解の中に、JB との關係が附記されているから、祭式に關する難問を解決するに有力な指針となる。また既に他の學者によつて發表された部分と照合して見て、從來疑問とされてきた語句が、必ずしも常に解明されたとは言えないが、この點は主として寫本の制約に起因するものであり、一部分はわれわれのヴェーダ語彙に對する知識の不足によるものと思われる。Lok. Chandra 博士は僅かに三頁の緒言を卷頭に載せているだけであるが、寫本の描寫、注解、文法・語彙の特徴、内容の摘要より他のヴェーダ文獻との關係に及ぶ諸事項、ならびに數種の索引を含む別巻を準備しつつあるという。Gavamāyana (II. 1-80) の部分の出版に添えられた序文及びその本文の注解から判斷して、豫告された別巻が、いかに有益であるかは、期して待つべきものがある。内容・言語に關する論議は、全てこの別卷の上梓後にゆずることとし、ここには唯 JB と最も密接な關連をもつ二ブラーフマナ、すなわちパンチャヴィンシャ (PB) 及びシヤタパタ (SB) との後先關係につき一言するにとどめる。

JB と PB との關係年代については、學者の間に意見の一致を見ない (cf. Renou: *Les écoles védiques*, Paris 1947,

pp. 101—102)。内容と言語の兩方面から考察して、Caland は JB を PB より古いと断定した(特) Over...het JB, pp. 13—28, PB tr. pp. XVIII—XXI)。Keith は有力な理由を擧げて、これを反對した(特) BSOS VI, 1932, pp. 1049—1050)。筆者は後者と見解を同じくするものである。PB の文體は概して簡素で古風の面影を存し、挿話も多くは既知の説話を暗示するに止まるとはいえ、JB を豫定した結果とは推定し難い。黒ヤシユル・ヴェーダの諸サンヒターの中にある挿話が、SB におけるよりも簡略であることを常としていることを想起すべきである。また文法の上から見て、兩ブラーフマナの間に認められる相違も、JB を古くとする根據とはならず、周知の如く、ヴェーダ學派はそれぞれ言語的特徴をもち、保守性の程度を異にする。PB がしばしば SBKāṇva と共通點を示すのに對し、JB が SBMādhv. と共通するところの多いのは注目値するが、これによつて兩書の後先を決定することはできない。兩書がたがいに相違する點において、PB がしばしば古典サンスクリットと一致するとしても、そのあるものは既にリグ・ヴェーダに萌芽を發し、或いはアタルヴァ・ヴェーダに進行の跡を見せ、或いは黒ヤシユル・ヴェーダに類例をもつている。逆に PB が却つて古めかしい

傾向を示す場合も見いだされる。例えば、物語の時稱として Imperf. を、女性 -ā, 語幹の Gen. Abl. 形として -yāṅ (-yai JB) を規則的に使用することは、Caland の見解 (PB tr. p. XX, p. XIX, n. 1) にもかかわりず、依然として關係年代の考察に見のがし得ない。現在の意味をもつ完形 *anaṣe, didaya* (cf. Keith op. cit. p. 1053) もまたその一例と考えられる。

次に SB がブラーフマナ散文の新層を代表することは、何人も否み得ないところであるが、挿話に富む JB の文體・言語が、SB と酷似することは、Caland も認めよう。"Van alle Brāhmanas is 't het Satapatha-brāhmana dat in vorm, stijl en taal het dichtst bij het Jaiminiyam. staat." (Over...het JB, p. 28) しかし兩書の後先關係は複雑な問題を含んでゐる (vide Caland op. cit. pp. 28—37, SBK Introd. pp. 101—102, cf. Keith BSOS IV, 1927, pp. 619—620)。JB が少くも SB の基本的部分 I—V M. (: I—VII K) の作者に知られてゐたとする Caland の見解には賛成できない。種々な論點はしばしば、JB の中で、Yajñavalkya (Yajñasaneya) 及び Janaka Vaidēha の名が、しばしば擧げられてゐることは (cf. Caland: Das JB in Answahl, Indices)。兩ブラーフマナの關係を論ずるに當つて、輕視の

せなり點である(詳しくは、宗教研究季刊第五年第三號、九  
 一二頁參照)。Yaj. Vaj.の名は、白ヤシメル・ヴェーダ  
 の傳承と引離しがたし關係にあり、かつ JB においてその名  
 の現れる場合には、常にその相應箇所或いは類似箇所を、SB  
 の中で求めることが出来る。JB I. 19—20: SB XI. 3. 1. 1—8  
 (JB I. 19 init.: SBK III. 1. 4. 1—2), cf. Vādhūta-Anvākh.

ラフマダッタが、Ajatasatru と同時代の人 Prasenajit (Pai  
 Pasenadi, 波斯匿王)の子であるならば、JB の年代に重大  
 な示唆を與える(上記拙論二七——二八頁參照)。ここには  
 ただ記して、佛敎文獻に精通する學者の考證をまつこととす  
 る。

(東京大學教授)

No. 40: Acta Or. IV, p. 35; JB I. 22—25 (輪郭物語):  
 SB X. 6. 1, cf. Chānd. Up. V. 11—18; JB I. 59: SB XII.  
 4. 1. 10; JB II. 76—77: SB XI. 6. 3, cf. Brh. Up. III. 9;  
 JB II. 228—229: SB II. 5. 1. 1—5. 兩ブラーフマナが現  
 形をこの二所をまじつたは、幾多の曲折を豫想し得るとしても  
 (e. g. JB II. 291—292: SBK II. 5. 2. 6—21, vide Caland:  
 Over...het JB, p. 37, Keith BSOS IV, p. 620) 一變則に  
 5 つの JB 中の SB 中の断片と考へ知るを得ない。最後に  
 JB I. 337—338 (Caland: Das JB in Auswahl, No. 115):  
 atha ha Brahmadataim Caititaneyam Brahmadataim  
 Prasenajitah Kausalyo rajā puro dadhe. tasya ha putrah  
 prācinavad babhāse. 「このブラーセーナジットの子にして  
 コーサラ王なるブラフマダッタは、ブラフマダッタ・チャキ  
 ターネーヤを、プローヒタ祭官となせり。彼(=コーサラ王)  
 の子は實に東國の者の如く語れり。」におけるコーサラ王プ